

学校改革の「活動空間 (action space)」

—J. マクドナルドの理論の展開—

○鈴木 悠太 (東京工業大学)

1. 問題設定

本研究の目的は、ニューヨーク大学のジョセフ・マクドナルド (Joseph P. McDonald) が提起する、学校改革を研究の対象として措定する「活動空間 (action space)」の理論を考察することである。その際に本研究が注目するのは、マクドナルドの理論の展開である。すなわち、マクドナルドが、マサチューセッツ工科大学のドナルド・ショーン (Donald A. Schön) (1930-1997) との共同研究において彫琢してきた、学校改革の「活動の理論 (theory of action)」(Schön and McDonald, 1998) の展開として、「活動空間」の理論について考察する。マクドナルドが「活動空間」の理論を駆使するのは、2014 年に出版した『アメリカの学校改革—何が成功し何が失敗し、それはなぜか— (American School Reform: What Works, What Fails, and Why)』においてである。この書が本研究の主な対象である。

『アメリカの学校改革』はまずもってショーンに捧げられている。ショーンを代表とし (マクドナルドはその副代表)、1994 年に着手された「アネンバーグ・チャレンジ拠点横断研究プロジェクト (Annenberg Challenge Cross-Site Research Project)」の成果が、同書の中心にあるからである。そして、ショーンの後を継いで「アネンバーグ・チャレンジ」による全米規模の学校改革の評価研究に取り組んだのがマクドナルドであった (Annenberg Institute for School Reform, 2003; Schön and McDonald, 1998)。その評価研究の理論の出発点を示したのが、1998 年にショーンとマクドナルドの共著書として公刊された『学校改革においてあなたが為すつもりであることを為す—アネンバーグ・チャレンジの活動の理論— (Doing What You Mean to do in School Reform: Theory of Action in the Annenberg Challenge)』である。すなわち、マクドナルドによるアネンバーグ・チャレンジの学校改革の評価研究は、ショーンとの共著からおおよそ 15 年を経て公刊されたのである。

アネンバーグ・チャレンジをめぐる一群の研究は、その学校改革による学業達成度の改善の程度、もしくは、学校教育の政治と政策という主題に集中している (Gregorian et al., 2005)。それに対し本研究は、アネンバーグ・チャレンジの学校改革の評価研究に関する理論に焦点を当て、このおおよそ 15 年の間隔によって、その理論の展開を見通すことが難しくなっているという問題に接近しその解決を試みるものである。

2. 「活動の理論」から「活動空間」へ

『アメリカの学校改革』の焦点は、学校改革の「活動の理論」に当てられている。マクドナルドは同書を次のように書き起こす。「学校改革において何が成功し何が失敗し、それはなぜか、というその副題にある 3 つの問いに答えるために本書は、読者に次の問いを掲げる。学校改革につい

て考える時、あなたは何を考えるのか。」(p. 1、強調は引用者)。この、学校改革について考える時にあなたが考えること、それこそが「活動の理論」である。ションとマクドナルドが、1998年の共著において、学校改革について「あなたは何をするつもりなのか」という問いかけから書き起こした「活動の理論」の諸概念が想起される (Schön and McDonald, 1998, p. 9)。

「活動空間」は、「資金」「市民の能力」「専門家の能力」という3つの資源で構成される三角形によって表される空間である。「活動空間」は日常的な仕事の空間ではない。「活動空間」は、外部からの3つの資源によって例外的に作り出される空間であり、学校改革を「想像できる」余白である (McDonald and the Cities and Schools Research Group, 2014, pp. 22-24)。

3. 「活動空間」の意義

学校改革の「活動空間」は決して静的な正三角形ではない。「活動空間」を構成する3種の資源は常に変化するからである。この変化を捉えることを可能にすることに「活動空間」の意義がある (McDonald and the Cities and Schools Research Group, 2014, pp. 23-24)。

さらに注目されるのは、「活動空間」の「議論 (arguments)」である。学校改革の「希望を抱く信念 (beliefs)」が「議論」を作り、その「議論」が「活動の理論」を構成する材料となる。学校改革において「議論は勇み立っている」。「教育者たちを専門家学習共同体 (professional learning communities) に動員せよ」という「議論」は何をもたらすのだろうか (McDonald and the Cities and Schools Research Group, 2014, pp. 20-22)。

*本研究は科学研究費 (課題番号 16K17377 「現代アメリカにおける学校改革理論の展開—D. ショーンとその周辺—」 (研究代表者: 鈴木悠太、平成 28~30 年度)) の成果の一部である。

主要参考文献

- Annenberg Institute for School Reform at Brown University, 2003, *Research Perspectives on School Reform: Lessons from the Annenberg Challenge*, Annenberg Institute for School Reform at Brown University, Providence, Rhode Island.
- Vartan Gregorian, Dan Katzir, Ed Kirdy, Lowell Milken, Lewis C. Solomon, and Frederick Hess, 2005, Rethinking America's Schools, *Philanthropy*, Philanthropy Roundtable Strengthening Our Free Society.
- Joseph P. McDonald and the Cities and Schools Research Group, 2014, *American School Reform: What Works, What Fails, and Why*, The University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Donald A. Schön and Joseph P. McDonald, 1998, *Doing What You Mean to do in School Reform: Theory of Action in the Annenberg Challenge*, Annenberg Institute for School Reform Occasional Paper Series, No. 4, A Joint Publication of the Annenberg Challenge and the Annenberg Institute for School Reform at Brown University, Providence, Rhode Island.